

百日咳菌の感染が大人や年長児で増加しています。

☆学童期以降の百日咳とポリオに対する免疫を維持するために、就学前の三種混合(ジフテリア・百日咳・ポリオ)ワクチンと不活化ポリオワクチンの追加接種が推奨されています。

また、11歳から受けることになっている定期接種の二種混合(ジフテリア・破傷風)ワクチンを三種混合ワクチンに変えることも推奨されています。

すべて任意接種(有料)になりますが、目前にある罹患リスクに対する対策として推奨されます。なお現時点で、就学前の3種混合ワクチンとポリオワクチンの接種を4種混合ワクチンで代用することは承認されていません。そして、4種混合ワクチンは4回までの接種に限られ、5回目以降の追加接種については、3種混合ワクチンかポリオワクチンを用いることになっています。

<百日咳>

感染力の強い病気です。感染した大人は苦しく長く咳が続きますが死亡することはありません。しかし、赤ちゃん、新生児でもかかることがあり、6か月以下、特に3か月以下の乳児が感染すると重症化し命にかかわることがあります。

低年齢で感染すると症状が重くなるので、多くの国では生後2か月頃からワクチンの接種を開始しています。また、米国では新生児の百日せきを予防するために、成人用三種混合ワクチンDPT(Tdap)を妊婦に接種して胎児への移行抗体を増加させることもおこなわれ、妊娠27~36週での接種が勧められています。

<ポリオ>

ポリオウイルスによって感染し、多くの場合は症状が出ないか、出てもかぜのような症状だけです。しかし約1,000~2,000人に1人は手足に麻痺が出て運動障害が一生の後遺症として残ることがあります。日本でもかつて大流行しました。その時は母親たちがマスコミとともにポリオ撲滅の大活動を行い、当時の厚生大臣はソ連やカナダから使用し始めたばかりのポリオの生ワクチンを緊急輸入して、子どもたちに投与しました。するとまたたく間に流行がおさまりました。世界ではポリオウイルスは激減しています。しかし南アジアやアフリカなどのごく一部の地域では現在でも流行しています。なかなか根絶できず、ワクチンを飲まなくなった地域で流行が起きています。欧米でも、宗教上の理由でワクチンを拒否する人たちの子どもの間で流行したことがあります。日本では、約30年前から患者は出ていませんが、世界との交流が盛んな現在ではワクチンの接種を長い間中止すれば必ず流行がおこると考えられています。

☆単独のポリオワクチン(IPV)は2012年9月に、四種混合ワクチン(ジフテリア・百日咳・破傷風・ポリオワクチン)は2012年11月に導入されました。海外では、小学校入学前の時期にポリオワクチンの5回目を接種しています。